

近代美術の至宝展 —明治・大正・昭和の巨匠—



安田靉彦《飛鳥の春の額田王》滋賀県立近代美術館蔵
後期展示 10月3日(月)～23日(日)

- 長谷川大治郎・梶本良衛 木彫二人展
- 加賀藩の美術工芸Ⅱ
- 石川の文化財【古美術】
- 秋の優品選Ⅱ【工芸】
- 優品選 一守・破・離一【近現代絵画・彫刻】

近代美術の至宝展

—明治・大正・昭和の巨匠—

9月10日(土)～10月23日(日) 会期中無休

現在、二階企画展示室で開催している「近代美術の至宝」展では、明治から昭和にかけて活躍してきたわが国を代表する美術作家の作品を一堂に展示しています。明治期に西欧からもたらされた美術の概念がわが国に定着していくにともなう、近代的な美術作家が登場してきます。その背景には、美術を学ぶ教育機関の設置、作品を公に発表する展覧会の開催、すぐれた作品を収集し保存・展示する美術館の設立といった美術を取りまく環境の整備が不可欠でした。また、かつて権力者や富裕層など二部の人々のたしなみであった美術が、広く民衆の身近な存在となっていくことで、作家の活動範囲が広がり、多様な制作を可能にしていったということができます。

本展に出品されている作品は、その素材や技法によって、大きく日本画・洋画・彫塑・工芸に分類されます。一概に述べることは難しいですが、展示作品のそれぞれの特徴を次のように大まかにまとめることもできます。日本画では、大きく分けて自然をモチーフとした作品と、歴史や物語に主題をとった作品が見られます。その中でも、余白を活かした作品と空間も色彩で塗り埋めた作品、また線描主体の表現と色面中心の表現があり、描かれた時代や個性の違いによって、多彩な表現が生み出されています。洋画では、西洋で写實的に絵を描くための二つの技法として油彩が発明され、わが国に紹介され、明治期に入って普及していきました。四角い画面を二つの空間と見なし、油彩独特のマチエールによって何かしらの存在感を示す、作者の強烈な個性の発現がうかがえます。彫塑は、古くは木彫が主体でしたが、西洋から塑像

の技術がもたらされると、明治以降急速に普及してきます。しかし、緑豊かなわが国の自然から切り出された木肌のぬくもりや彫刻された鑿^{のみ}の味わいは、今日でも独特の雰囲気をもし出しています。一方、塑像は粘土で成形するため写實的な表現が可能で、より現実味をともなつたドラマチックな造形を見ることができまます。工芸は、陶磁・漆工・染織・金工・木竹工・人形・ガラス・截金など、それぞれの素材を活かしながら、熟練した高度な技によって格調の高い表現が行われています。

以上、近代日本美術の多彩な表現をお楽しみいただければ幸いです。

◆講演会

演題／工芸の近代―作家の誕生と以降の創作表現

講師／山崎達文氏(金沢学院大学教授)

日時／10月2日(日) 午後1時30分

会場／美術館ホール

※聴講無料・予約不要

学芸員の眼

先月号の「眼」では、近代のエネルギーな側面について触れました。各地の若者が、自ら新たな波を起こそうともがいた時代。それはまさに、職人から「作家」が誕生した瞬間でした。ただし、これはどの分野においても同時に起こったわけではありません。とりわけ工芸品は「用」と「美」の二側面を切り離すことが難しく(前近代の絵画もまた、そう言えなくはありませんが)、純粹な芸術作品をめざす動きと、機能性を求めて伝統を振り返る動きとが、作家たちを揺さぶります。このことは、造形そのものにはつきりと表れました。本展示には、そうした様々な理想を反映した作品が出品されています。作品を通じ作家ひとりひとりの姿に、思いを馳せていただければと思います。本展は近代の名品が揃う機会です。お見逃しなく。



牛島憲之《炎昼》
京都国立近代美術館蔵



江口週《鋏形の碑 No.5》
神奈川県立近代美術館蔵



浜田庄司《柿釉格子掛盛皿》
東京国立近代美術館蔵

石川の文化財

10月14日(金)～11月15日(火) 会期中無休

石川県には、優れた貴重な文化財が数多く伝えられており、重要文化財は美術工芸品で八十八件、建造物が四十四件を数えます。そのうち国宝は二件。当館が所蔵する野々村仁清作「色絵雉香炉」と白山比咩神社所蔵の「剣 銘吉光」です。本年九月現在、国宝の総数は一一〇一件、重要文化財は一一一〇件となっております。北陸では重要文化財で富山・福井両県をしのぎ、全国的に見ても上位に位置づけられます。

こうした文化財が石川に伝わるのは、加賀藩主前田家の文化政策によるところが大きく、その歴史的背景を基盤とした今日の文化風土は、芸術・文化全般に対する関心の高さを物語っています。前田家が収集し、育成した数々の名品が、時代を超え

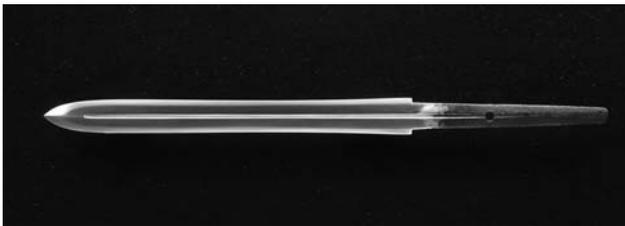
を最初に挙げたいと思います。室町時代十五世紀には、大画面の水墨山水図が数多く描かれるようになりますが、本図はその初期のものと考えられます。「狩野探幽が画中に「周文筆」と記しているように、周文様式の基準作として江戸時代に高く評価されていたことがわかる点でも注目されます。

さらに今回は、後藤家の装剣小道具から初代・祐乗の作品を選んで展示しています。祐乗は美濃国出身で、足利義政に仕えた装剣金工の最高位と評される名工です。そこで、室町から江戸時代の大名は、祐乗による筭、目貫、小柄を熱心に収集しました。初代・祐乗に特化した展示の機会はなかなかありませんので、是非その洗練された技と美をご堪能ください。

今日に引き継がれているとともに、その以前から支配者によって寺社に奉納された文物は、地域の歴史や、文化を語る上で欠くことのできない貴重な文化財として今日に伝わっています。

当館ではそれらの文化財、中でも美術工芸品を中心に収集活動を行い、保存と活用を目的として県内の寺社や個人の方々から多くの寄託を受けています。本展は、石川県の貴重な文化遺産の一端を広く知っていただくとともに、文化財保護法に定められている寺社が所蔵する国宝・重要文化財の今年度の公開を目的として開催します。

石川県に所在する国宝、その二件を同時に見ることのできるまたとない展覧会です。ぜひこの機会をお見逃しなく。



国宝《剣 銘吉光》白山比咩神社蔵

加賀藩の美術工芸Ⅱ

10月14日(金)～11月15日(火) 会期中無休

今回の展示では、Ⅰ・Ⅱ期にわたる国宝《十卷本歌合》をはじめ、《玉燭宝典》、《黄帝内経》、《新猿楽記・弘安本、古抄本》(以上重文)の展示が大きな話題となっております。書かれている内容は平易なものではないかも知れませんが、平安時代から南北朝時代までの書の美を楽しんでいただく貴重な機会といえます。そして、このような加賀藩主による書籍・典籍類の収集が、美術工芸の名品の収集や名工の招聘と連動した文化政策の成果であることを、「加賀藩の美術工芸」と題した今回の展示で改めて強調したいと思います。

その他Ⅱ期の見所としては、大名家の文化度を表明する重要なコレクションとしての水墨山水図の名品から、周文の作と伝わる重文《四季山水図》

を最初に挙げたいと思います。室町時代十五世紀には、大画面の水墨山水図が数多く描かれるようになりますが、本図はその初期のものと考えられます。「狩野探幽が画中に「周文筆」と記しているように、周文様式の基準作として江戸時代に高く評価されていたことがわかる点でも注目されます。

さらに今回は、後藤家の装剣小道具から初代・祐乗の作品を選んで展示しています。祐乗は美濃国出身で、足利義政に仕えた装剣金工の最高位と評される名工です。そこで、室町から江戸時代の大名は、祐乗による筭、目貫、小柄を熱心に収集しました。初代・祐乗に特化した展示の機会はなかなかありませんので、是非その洗練された技と美をご堪能ください。

国宝《十卷本歌合 巻第8》(部分)

長谷川大治郎・梶本良衛 木彫二人展

10月14日(金)～11月15日(火) 会期中無休

学芸員の眼

木彫材料である「木」は、我が国においては太古から、生活・文化全般の基本的素材・道具としてあるもので、日本人にとって木への愛着と記憶はたいへん深いものがあります。いわば我が国の基層文化に根差して木は今に生きているものといえます。そんな観点から両氏の作品を眺めますと、民俗(民間伝承)における有形資料としての「民具」と、伝承、なかでも「昔話」が当てはまりそうです。長谷川氏の作品には「民具」を連想する、どこか懐かしくまた生活の痕跡が感じられる一方、梶本氏の作品には「語部かたりべ」を連想させる独特の雰囲気や宿されている様に感じられます。木の声に耳を傾けながら制作を進める二氏の作品をお楽しみください。

現在、本県を代表する木彫家、長谷川大治郎氏と梶本良衛氏による二人展です。

長谷川氏は、昭和二十五年(一九五〇)金沢市生まれ。金沢美術工芸大学彫刻科を卒業後、同校研究科を経て母校で教鞭を執りながら、二科展及び、現代美術展を中心に作品発表を進めています。

梶本氏は昭和二十六年(一九五一)、能美市(旧寺井町)生まれ。同じく金沢美術工芸大学彫刻科を卒業後は、新制作協会展や現代美術展を中心に作品発表するほか、グループ展活動等にも積極的に参加するなど多角的に活動中です。このように両氏は生まれも近く、同じ学校の同じ専攻出身で、今までの制作の環境と経緯はよく似ているといえましょう。しかし両氏の作品の違いを見せています。

長谷川氏は、抽象形態の構成的な仕事から、今では抽象・具象的パーツを混ぜ空間構成した作

品が多く見えます。木、なかでも材木の持つ属性を生かしながら、生活感・痕を留める制作志向といえます。

一方の梶本氏は、一貫して木彫による人体をモチーフとする制作を続けています。様々な姿態の人物は、原木素材との対話を通してながら独自のフォルムによる制作であり、また作品表面の凸部を中心に漆を塗る特徴が見えます。

このように一見、好対照をみせる両氏の作品ですが、ともに木の素材との対話を通してながらそれぞれ独自の方向性を打ち出しながら制作を続ける両氏には、彩色や漆を施すなどといった共通点も窺えます。かたちを違えながらも、木という懐かしくもありまた多弁な素材を媒介にする、多彩な作品展開をお楽しみください。



梶本良衛 《森の中》



長谷川大治郎
《仮面と生命体と空間》

第5展示室【工芸】

秋の優品選Ⅱ

10月14日(金)～11月15日(火)
会期中無休

今回の近現代工芸コレクション展では、前回に引き続き、秋の風情を感じさせる意匠をまとった作品に、日本芸術院会員や重要無形文化財保持者(人間国宝)の作家による優品を交えて、美術の秋にふさわしい内容で構成します。

秋の意匠が見られる作品としては、北大路魯山人《染付錆絵紅葉文八角向付》、大場松魚《平文薄の棚》、羽田登喜男《友禅鼠色地群菊文訪問着「清秋」》、森口華弘《友禅訪問着「白菊」》などが、秋の季節感を巧みに表現しています。また、芸術院会員で人間国宝の富本憲吉《竹林月夜図皿》にはのびやかで洒脱な描写、松田権六《松蔞絵飾箱》には熟練した高度な技を見ることが



森口華弘《友禅訪問着「白菊」》

第3・6展示室【近現代絵画・彫刻】

優品選 一守・破・離一

10月14日(金)～11月15日(火) 会期中無休

守^{しゅ}破^は離^りとは茶道や、武道、芸能における師弟関係の在り方を表す言葉です。つまり、師について型を学ぶ「守」の段階、次いで、型を破り、自己の道歩みだす「破」の段階、最終的に何にも拘らない融通無碍の「離」の段階という具合に。

それは学ぶ者や芸能であれば芸や作品の進化にも使われます。当館の所蔵品で例をあげれば、鴨居玲の金沢美術工芸専門学校時代の二紀展出品作《青いリボン》と名づけられた裸婦像は、まだ習作の域を抜け出さず、また宮本に学んだ柔らかな表現が、師の影響下にある「守」の段階にあることを示します。次いで、鴨居の画壇デビュー時の作品である《静止した刻》はゲームに興ずる男達の瞬間の動作・表情を捉えた、自己のスタイル確立期、

つまり「破」の段階といえます。

では、「離」はどの辺りでしょうか。異論はあるかと思いますが、バリ時代の終わり一九七六年以降ではないでしょうか。作品でいえば共に七十六年の《旅》や《蛾》以降となります。スペイン時代は鴨居にとつて最も制作のはかどった時期と、自身述べているのですが、スペインロックの影響をととても強く感じ、逆に「守」の段階ではとも思っています。

今回の展示では館蔵の絵画・彫刻作品中、日本画では石川義、洋画では高光一也、鴨居玲、そして彫刻では木下繁など、各作家の習作期、様式確立期、円熟期の三段階の作品によって、制作の変遷・深化をご覧いただきたく思います。



鴨居玲《青いリボン》



鴨居玲《蛾》

10月前半の展覧会

立見榮男展【第3展示室】

―野に棲むあるじたち―

立見展は第4展示室を三分割し、時計回りにほぼ年代を追って二紀展出品の大作を展示しています。そして、第3展示室の奥には立見氏の少年時代からの作品を配し、普段は開けない奥の扉を開いて、第4と第3展示室とを行き来できるようにしました。

メインの第4展示室を回りますと、人の色彩感覚は少年時代の環境が決定するののかとの思いがします。近作になるに従い、緑を主体の画面はカラフルに明るくなるのですが、それは晩年の宮本三郎の赤や黄と同じように、太平洋側や瀬戸内の画家の色、たとえば、裕伊之助や藤本東一良の色とは違います。十八歳以降を茨城で暮らす立見氏ですが、北陸人のいくぶん重い色彩だと思えます。そして、河童や鯰、風神・雷神などのモチーフを、年代を隔ててあちらこちらに登場させる手法に、工学系を歩んできたシステムチックな理性を感じます。会期も終盤になりました。ぜひ一度ご覧いただきたく思います。

◆アーティスト・トーク

展覧会場にて、作家が自作について語ります。

日時／10月9日(日) 午後2時

※要観覧料・予約不要



加賀藩の美術工芸Ⅰ

【前田育徳会尊經閣文庫分館】

今回は、国宝・重要文化財を数多く展示していますが、指定文化財以外にも公開の機会が非常に少ない名品が展示されています。たとえば、「前田綱紀見製」による《海岸図屏風》もそのひとつです。図様としては「西海航路図」と位置付けられるのですが、加賀藩五代藩主・前田綱紀がどのような関心をもって本図成立に関わったのか、実に興味深いものがあります。

福者認定記念 高山右近

【第2展示室】

高山右近の福者認定は、右近の足跡をはじめ、十六世紀から十七世紀に至るアジアひいては世界のキリスト教受容の実態を再検証する重要な契機となりました。今回の展示もささやかではありますが、右近在世時から没後の日本国内と日本を取り巻く世界の状況について新たな視点を提示しています。右近ゆかりの地にあり、右近の貴重な自筆書状や茶道美術の優品を所蔵している美術館として、今後とも様々な切り口で高山右近とその時代に光を当てたいと思います。

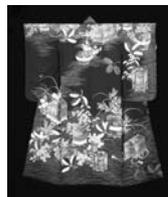


《キリスト・聖母子念持像》
金沢聖霊修道院蔵

《真鳥羽入筆筒》

秋の優品選Ⅰ【第5展示室】

日が暮れると聞こえてくる虫の音に、秋を感じる方も多いのではないのでしょうか。かつての日本では「虫聞き」といって、秋の夜に野山へ出て、虫の音をたのしむ催しがありました。お酒を飲んだり、歌を詠んだりしながら、ときには有明の月となるまで行われました。今回の展示の中にも、三代中川華邨《友禅紫地虫籠秋草文訪問着》など、秋の情趣をおたのしみいただけるものが出陳されています。ぜひ展示室で、しっとりとした夜の空気を感じてください。



三代中川華邨
《友禅紫地虫籠秋草文訪問着》

石川の作家現代編

【第3・6展示室】

石川県に關係する、日本画、洋画、彫刻の現代作家の作品について、館蔵品を中心に紹介いたします。時代区分としては戦後以降の作品が中心となりますが、戦後生まれの作家のみならず、戦前から活躍していた作家の作品も含めた展示となっています。戦後美術の特徴は、世界的な規模で多彩な展開が広まったことで、本県でも伝統的な制作のほか、斬新な作品が制作されています。多種多様な様相を示す現代作家の活躍をご覧ください。



末政哲雄
《天空の上の獅子座》

第47回文化財現地見学、参加者募集！

三重再訪 -古きいのり、新しき旅路-

期 日／平成28年10月22日(土)～10月23日(日) 一泊二日

日 程／出発 10月22日(土) 午前7時

帰着 10月23日(日) 午後8時頃

発 着／金沢駅 金沢港口(西口) 団体バス乗り場

参加代金／友の会会員 二五、〇〇〇円

会員以外 二六、〇〇〇円

※移動は全て貸切バスを使用します。

※宿泊はお一人様一室(シングル)となります。

◆見学地

【専修寺】

真宗高田派の本山、専修寺。現在の伽藍は、江戸時代建造の御影堂を中心に、山門や如来堂、御廟などが重要文化財に指定。平常非公開の庭園を含め、お寺の方にご案内いただきます。(雨天時は書院を見学予定)

【齋宮歴史博物館】

天皇に代わり伊勢神宮に仕えた女性、齋王。齋宮跡のすぐそばで、出土品を中心に齋王の歴史をたどります。当日は常設展とあわせ、企画展「古代の出雲―その限らない魅力」を見学します。

【賓日館】

明治二十年、伊勢神宮に参拝する賓客の休憩・宿泊施設として建設。重要文化財に指定され、当時の雰囲気をとたえています。館内には輪島塗の装飾も。近代における伊勢参りの一様相を感じていただける空間です。

【朝熊山金剛證寺】

伊勢神宮の鬼門を守る寺として「お伊勢参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参り」と歌われた金剛證寺。当日は平常非公開の宝蔵もご案内いただき、長い歴史の中で保管されてきた文化財をご覧いただきます。

【伊勢神宮内宮・外宮】

まず外宮(豊受大神宮)を訪ねます。お伊勢さん観光案内の方にガイドしていただき、伊勢うどん・手こね寿司の昼食をとったあと、内宮(皇大神宮)へ。伊勢神宮の長い歴史や、建造物の意味など、改めて理解を深めていただくきっかけになればと願っています。

◆申込方法

往復葉書に「文化財現地見学」希望と明記し、氏名・年齢・性別・郵便番号・住所・お電話番号・会員番号を記入の上、ご応募ください。

※応募者多数の場合、抽選になります。

◆宛先

〒九二〇―〇九六三 金沢市出羽町二―一

石川県立美術館「文化財現地見学」係

平成二十八年十月十日(月・祝)必着

※行程に徒歩移動や坂道、階段が含まれます。脚に自信のない方はご注意ください。

行事予定

■映像ギャラリー	午後1時30分～	美術館ホール	聴講無料
10月10日(月・祝)	「日本画の伝統と変革」 「糸の音色を求めて 志村ふくみの世界」(40分)	(25分)	
■土曜講座	午後1時30分～	美術館講義室	聴講無料
10月1日(土)	加賀藩の美術工芸	修復工房次長 高嶋 清栄	
10月8日(土)	近代洋画の探求	普及課長 二木伸一郎	
10月15日(土)	近代工芸の名作	学芸第二課長 西田 孝司	
■展示室でスケッチGO！	午後1時～3時受付	要観覧料・予約不要	
10月10日(月・祝)	磁気式お絵かきボードを使って、 展示室でお気に入りの作品をスケッチ！		
■0才からのファミリー鑑賞会	①午前10時～ ②午後1時30分～		
10月16日(日)	※要予約(先着順・各回定員30名) 各回一時間半程度 小さなお子さんと一緒に展示会を楽しむ方法を、ご案内します。 講師：富田めぐみ氏(赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会・代表理事)		
申込：電話〇七六一―三三二―七五八〇(石川県立美術館 普及課まで)			
料金：幼児は無料。			
保護者の方は二人目から、企画展観覧料として八〇〇円がかかります。			

